

ウジヤという名前は「主は私の力」という意味で南王国ユダの10代目の王。アザルヤとも呼ばれています。時は紀元前8世紀頃のことでした。彼は16歳で王となり、52年間国を治めました。ユダとイスラエルの王たちの中でマナセに次ぐ最長の統治期間ということになります。ウジヤは父アマツヤと同様、主の目にかなうことを行ったが、ただ一つ高き所を除くことはせず、そこでいけにえをささげたり、香をたくことなどは廃止しませんでした。列王記にはウジヤについての記録は少ないが歴代誌にはかなり詳細にわたって記述されています。そこにはウジヤが「主を求めていた間、神は彼を栄えさせた」とあり、外敵に対しても勢力が並はずれて強く、また内部の防備を強化し、守りを堅固なものにしたことが記されています。しかし人間ウジヤの弱さは、心の高ぶりによって露呈し、身を滅ぼす結果となりました。聖別された祭司のみが香をたくことになっている祭壇に自ら香をたこうとして神の怒りにふれ、その時「突然、彼の額に重い皮膚病が現われた」とあります。彼は死ぬ日まで重い皮膚病に冒され、隔離された家に住みました。

1931年に「ウジヤの骨箱の碑」がエルサレムから出土しました。碑にはアラム語で「ユダの王ウジヤの骨をここに携え来る。開けるべからず」と記されていた。おそらく紀元1世紀の作であることから、アグリッパ2世のエルサレム修理工事中に偶然ウジヤの墓を見つけ、その骨を箱に入れて移したものと思われる。ウジヤの名声の高いことを示すものです。

本日の旧約聖書が記された紀元前8世紀、旧約聖書の中では古い時代を背景とする中に、天国における栄光を預言者イザヤが垣間見たのが本日の箇所です。ここには天国の栄光、そして主なる神が大いなる栄光のもとで人間を救おうとしておられること、そして宣教と言う手段をもってその目的を達成しようとしておられることが示されています。イザヤはその呼びかけに応じ、預言者として主なる神の言葉を預かりつつ、遣わされていくことになるのでした。イザヤが主なる神から預からねばならなかった言葉はとても重いものでした。何故ならば、先ほどのウジヤ王のように、正しく生きようとする中にも主なる神の怒りに触れる部分があったり、最初から正しく生きようとしなかったりする人々に対し、警告の言葉と、正しい道に立ち帰るべきことを伝えねばならなかったのです。つまり人々にとって耳の痛い、自分自身の根本を見つめることを神が望んでおられるのを伝えねばならなかったのです。

本日の使徒書は、ヨハネの黙示録が選ばれておりました。ヨハネの黙示録は新約聖書の最後に収められている書物ですが、非常に難解な文章や比喩が続き、とかく敬遠されがちな書物になっています。黙示文学は当時のユダヤ社会で好んで用いられていた文学形式でした。また当時キリスト者は、日々迫り来る迫害のもとで信仰生活を送

らねばなりませんでした。殉教の危険が明日に迫っていると言っても過言ではない中での信仰生活だったのです。ヨハネはそのような中で、天国の様子を少しだけ垣間見させてもらったのです。その様子がこの黙示録にかかれており、本日の使徒書の部分はその冒頭の部分になり、天国の礼拝の様子がその内容となっています。ヨハネはこうしたことを書きながら、世の終わりは近い、主イエスはすぐにも再びやってくる、だから私たちは命をも惜しまないで最後まで信仰を貫こうではないかと読者に伝えたのです。

教会の苦難が予告されても、失望してはならない。ヨハネは、神の御座においてどのような礼拝がなされているかを示される。〈聖なるかな〉(8) が3度繰り返されることにより、三位一体の神への礼拝、すべてのものを永遠に支配しておられる方への礼拝がやむことなく続けられています。生き物の姿は、ただ礼拝がなされていることだけではなく、全被造物の本来のあり方を示しています。また贖われた者の代表を暗示しています。アダムとエバの墮落以来、誰ひとりとして神を賛美することが出来なくなっていたことを思う時、神への賛美はまさに恵みであると言えましょう。ヨハネはこのように、神の創造と支配と完成を前もって見せられたのです。それは、現在と将来において待ち受けている苦難が神の御座と無関係に起るものではないことを知るためもありました。キリストと共にある者たちが最終的に受ける栄光を見ることにより、ヨハネはまず励ましを受けたのです。

これらの聖書のメッセージより私達は三位一体の主なる神について学びます。三位一体といいますと、歴史的にも神学の争点となった事柄であり、私たちが信じる神の正しい姿を言い表したものです。このように三位一体は難しい事柄ではありますが、三位一体は難しい神学の中にあるのみのことではなく、私達の間で働かれた偉大な主なる神の業、それによって私達に与えられた恵みに心を寄せ、主への信仰を深める日なのです。

本日の福音書には、父なる神の愛、主イエスキリストの購いの業、そして私達を真理へと導いてくれる聖霊、この父と子と聖霊の三位一体の神がわたしたちに常に働きかけていることを主イエスが示しています。

また本日は聖霊降臨後第一主日です。これから11月まで、わたしたちは聖霊降臨節を過ごしていきます。聖霊降臨節は、わたしたちの間に働き、私達を真理へと導く聖霊の存在を実感し、その導きに従って歩むことを心がける季節であるとともに、主イエスがこの世界でなさった働き、すなわち教えや奇跡について学んでまいります。本年はC年ですので、主にルカによる福音書から主イエスの教えや奇跡物語、天国の栄光がこの地上に示されたことを学んでいきます。三位一体の神への信仰と共に、半年近くにわたりますわたしたちの聖霊降臨節に主の導きが豊かにありますように。